

【第二部 記念講演】

○司会（小原 勉） ただいまから第二部に移ります。

初めに、記念講演の旭堂南陵先生の略歴をご紹介します。

南陵先生は、現在大阪芸術大学の客員教授をお務めですが、講談の道へ進まれたのは1967年4月、近畿大学へ入学と同時に第三代旭堂南陵師匠に師事したときに始まります

1973年3月には、大阪府立大学農学部大学院修士課程を修了され、農学修士となっておられます。1978年4月28日には、「旭堂小南陵」を襲名され、真打ちに昇進されました。2006年8月18日には、三代目旭堂小南陵から、大名跡であります四代目「旭堂南陵」を襲名され、今日に至っております。

講談と並行して、長年講談落語速記本の収集と研究に励まれ、その業績が認められまして2011年2月、大阪芸術大学から学術博士号を授与されておられます。これは寄席芸人では初の快挙でございます。

それでは、長年のご研究成果をもとに、「大阪の講談速記本の研究」のテーマで記念講演をお願いいたします。

~~~~~

### 1 「大阪の講談速記本の研究」 旭堂 南陵（大阪芸術大学）

南陵でございます。講談の速記本、落語の速記本、どのような形でやるんですかとよく聞かれますけれども、昔の記録を見ますと、やっぱり講談師や落語家の家へ行ったり、あるいはおうちで筆記をして、そこから文字に復文するというふうな作業をしておったようでございます。

もちろん、全部の作品が速記ではなくて、実は「書き講談」というのが初期の時代からありました。それはもう当然のことなんですね。速記記号で書いて、それをば文字に直して行って、そこから出版をするよりも、初めから書いていったほうがいいわけですから、ちょっと才能のある速記者とか、そういった人々は、自分でもう粗筋を聞いてそのまんま筆記をしていたというふうなこともあったようございます。

大阪の速記というのは丸山平次郎と山田都一郎<sup>といちろう</sup>の2人が大方持っておりました。初期の段階は大抵この2人が速記をしておったと思っていただいて間違いございません。

速記本はどれぐらい出版されたかと申しますと、菊判サイズと言われているものが1,800冊近く出ております。私の調べで1,781冊あったと思いますが、その後、収集しているうちに、論文を書き終わってからまた出てきたりもしておりますけれども、大体1,800冊、こう思ってくださいって間違いございません。

実は、大阪の速記本のほうが関東の速記本よりも人気があったんですね。何で人気があったかという  
と、あだ名が「赤本<sup>あかほん</sup>」と言われているぐらい大阪の速記本はカラフルでありました。そして、中に錦絵風  
の木版画が口絵<sup>くちえ</sup>として必ず入っておりました。これが東京と大阪を区別する一つの目安でございます。  
中のほうに木版刷りの口絵があるのが大阪です。東京のはありません。

このごろは木版画だけがどうも一人歩きして収集されたりしております。こないだも南カリフォルニ  
ア大学から、「口絵ばかりだ、これのもとは何からだ」というふうなことで問い合わせがありました。  
インターネットの時代になるとすぐ調べよるんですね。「大体これはこの本かな」ということですがけれど  
も、実は、こういう体裁のものは講談本だけではなくて、普通の小説も、その当時、村上浪六<sup>むらかみなみろく</sup>だとか、  
そういうふうなものもこういうサイズで、中に口絵があったんで、問い合わせの半分ぐらいがわかった  
程度でございますけれども、カラフルなものです。

そして、もう1つ人気の秘密が大阪の速記本にはありました。何か。これは『水戸黄門九州漫遊記』  
です(示す)。関東の『水戸黄門漫遊記』は1冊にぎゅっと凝縮されているんです。ところが、『九州漫  
遊記』の出版書目を見ると、『水戸黄門東国漫遊記』『北国漫遊記』『四国漫遊記』『中国漫遊記』『九州漫  
遊記』『九州漫遊記後編』、これだけあります。でも、これからまた後に『関西漫遊記』とかいろいろ出  
てくるんです。

つまり、大阪の講談本をこうして手に取ると、次を借りぬと仕方がないというシステムにうまいこと  
なっているんです。関東のほうはというと1冊ですから、もうそれで済んでしまうんですね。そのかわ  
り大阪のはだらだらと長い。余計なものがいっぱい入っておまして、凝縮すると1冊ぐらいにしか納  
まり切らんですけれども、しかしそういう形でやるから貸本屋さんが喜ぶんですね。最初はどうも個  
人の持ち物として買ってあったようだけれども、やっぱり好評になってくるといって、貸本屋さんの  
ほうに出回っていくという形です。個人で買うには、この当方で30銭というふうな値段でございます  
から、大変に高うございます。

大阪でどこが速記本の主導権を握っていたかというたら、平成の10年ぐらいまででしょうか、心齋  
橋にあった駿々堂<sup>しんしんどう</sup>さんですね。バブルで料理屋に手を出したりしたもんですから、遂に潰れてしまいま  
した。今、大阪で講談本で残ってるのは、馬のマークの参考書の受験研究社、本当の会社名は岡本増進  
堂ですが、そこだけが残っているという惨たんたるありさまでございます。

それで、最初に出したのが何かというと、東京の『百花園<sup>ひゃっかえん</sup>』のまねをしまして、大阪では『百千鳥<sup>ももちどり</sup>』  
という雑誌でございます。『百千鳥』というだけで『百花園』のまねしやなというのがわかりそうなも  
んでございます。

これの全ぞろいは、つい最近大阪の中之島図書館に入りました。ですから、1年後ぐらいになるとマイ  
クロフィッシュか何かにおさまるんじゃないかな、デジタル化されて一般公開されるんじゃないかなと  
思っております。これは言わんでもいいんですけれども、売ったところは杉本梁江堂<sup>りょうこう</sup>でございます。

実は、この『百千鳥』は、中を見ると今の漫画と一緒になんですね、いろんなストーリーのものがず  
っと何冊も順番にあります。ここでは『旗本五人男』、それから『祐天小僧<sup>ゆうてん</sup>』『三賢明智伝<sup>さんけんめいち</sup>』『雪の下艸<sup>したくき</sup>』『曾呂利  
茶室落語』とか、そういうふういろんなものがずっとあって、これ1冊買うたところで、次の連載も  
のを買わなければならないというシステムなんです。恐らく2,000冊か3,000冊程度だったろうと思  
います。今の残ってる分量から見ると、それぐらいしか出版されてなかったんだらうなということがわか  
ります。

ところが、これではちょっと行き詰まるんですね。やっぱり連載、連載ばっかしになって、字ばっかりですから、どっかで行き詰まったんでしょね。そこで、『百千鳥』ではいかんというので、一冊読み切り形式になりました。これは『山縣大弐』<sup>やまがただい に</sup>ですけれども（示す）、ずっと一冊読み切りという形になりました。これが菊判サイズの原型と言えは原型なわけですが、間にちょっと『ことばの花』というものも（示す）、一冊読み切りでございますけれども、入っております。これが一冊読み切りになって、そこから一冊読み切りではというので、もう一遍型を大きくして連載形式が入ってくるということです。だから、『百千鳥』があって、『ことばの花』があって、『新百千鳥』、これが順番でございます。

昔は、実は著作権というものはあつてないようなものでして、「版權」といひまして、各社が出しているんですけども、『一休禪師』<sup>いっしゅうぜんじ</sup>なんかを見ると、演者が違って速記者も違うのに中身はみな一緒なんですね。ですから、あわてて借りたら、「あれ、この『一休禪師』、どこかで見たことある『一休禪師』やな」と、そういうふうなことも昔はあつただろうなと思います。

大体、大阪の速記本は田鎖綱紀門下の丸山平次郎だとか山田都一郎<sup>と いちろう</sup>だとか、そういった人たちがやっております。ところが、先ほど申しましたとおり、山田酔神<sup>すいしん おてつ</sup>（阿鉄）とか、そういった二代目玉田玉秀齋<sup>たまだぎょくしゅうさい</sup>の家族の人たちが本格的に実は書き講談というものをやります。それまでも書き講談は若干あつたんです。吉田松茵<sup>しょういん</sup>というペンネームでやっていた人もいらっしゃつたんですけども、「もうそんなん、山田都一郎の手をかりんでも、丸山平次郎の手をかりんでも、我々でやってしまおうやないか」というふうなことが玉田玉秀齋の家族の中で起きてまいります。そこから書き講談というのが始まるんです。

しかし、書き講談は、今までは面倒くさいとか速記の手間を省くというふうなことだけで実は捉えられておつたんです。私、大方速記本を見ましたけれども、やっぱり明治40年ぐらいでネタが尽きてまいります。そら、1,800冊近く出していきますとネタが尽きて当たり前です。そうすると、もう創作しなくなるんですね。

だから、最初の丸山平次郎やとか山田都一郎やとか井下士青<sup>いのしたしせい</sup>、その辺が出ている時代は、割と講談師が持っているネタをそのままやってきました。明治の20年ぐらいから大阪では本格化します。ごく初期の10年間ぐらいですね。本当に講談師が持ちネタをずっとやって、それをば筆記したりしていたんです。それがもうネタが行き詰まってきますから、どうしても創作に走らざるを得ないというふうなことになってきます。

それで、創作で才能を発揮したのが、玉田玉秀齋<sup>たまだぎょくしゅうさい</sup>というのを名義人にいたしまして、義理の息子だとか、そういった人たちなんですね。それが『真田十勇士』であつたり『猿飛佐助』であつたり、そういうふうな形のもものがずっと整い始めます。

しかし、初めは「真田三勇士」やつたんですな。そのうちまたふやして「七勇士」ぐらいになるんです。それで、とうとう最後に「十勇士」に仕立て上げるんですね。大体、三好清海入道<sup>せいがい</sup>なんて、どう考えても三好という一族は徳川のほうの一族なんですが、「こんなもん、引っ張ってこい」てなもんで引っ張ってまいります。

猿飛佐助も、定説では山田阿鉄、ペンネームが酔神、彼が石鎚山の麓の猿飛橋からヒントを得たというふうなことが『女紋』<sup>おんなもん</sup>という小説に書かれてあります。これはうそです。足立巻一<sup>あだかま いち</sup>さんもそんなうそに乗せられたんですね。だって、天保時代とかを見ると、もう猿飛は出てきているんです。あの当時の講談師としては、猿飛というのはごくごく当たり前の常識なんです。霧隠才蔵<sup>きりがくれ</sup>も常識なんですね。でも、僕は最初にそういうふうなことで研究なさつた足立巻一さんの『立川文庫の英雄たち』——「タツカワ」

ですからね。「タチカワ」ではございませんし、「タテカワ」でもございません。今でも立川文庫創始者の出身地である姫路のほうへ行くと、立川<sup>たっかわ</sup>という姓がたくさんあります。

で、『立川文庫の英雄たち』を書いた足立巻一さんに、私、さんざっぱらご注意申し上げたんです。「ほかの速記本の中にもありますよ。それに先行するところにちゃんと猿飛とか霧隠はありますよ」と申し上げたんですけれども、ちょっと聞いてくれませんでした。「いやいや、そうじゃないんだ。これは山田酔神のつくったものである。猿飛佐助と、サとサで韻を踏んでよかろう」というふうなことが『女紋』という小説の中で書かれてありますが、小説ならば全くそれで結構でございましょう。

ところが、あれをば史実として捉えて、いまだにちょっとした歴史の本、こんな薄っぺらい、ああいいうところを見ると必ず『立川文庫の英雄たち』と『女紋』から「真田十勇士のできるまで」というふうなことを書いてあります。私の本を見い！（笑）。『続々明治期大阪の演芸速記本基礎研究』を見たら一目瞭然。「真田十勇士のできるまで」とか、みんな書いてあるんですけども、古本屋でこういう安い本を作家たちとか中途半端に研究している人たちが買うてきて、それで原稿料を稼いでしょね。そやから、歴史の本を見たらそうですわ。いつも私は抗議の手紙を書いたりするんです。やっぱり間違えたものはちょっと変えていただきたいなということですね。

大阪の駿々堂を見ると一番典型的なことがわかります。何で速記本というのが受け入れられてくるか。東京もそうなんです。圓朝であつたり松林<sup>しょうりんはくせん</sup>伯円であつたり、そういった人たちが速記本を明治17～18年ごろから続々と出していきます。

大阪もそうなんです、戯作本<sup>げさく</sup>というものがあります。このあたりは後の関山さんにお任せもいたしますけれども、物の見事に戯作本がびたつとまって入れ代わっていくということが、駿々堂の動きなんかを見ているとよくわかるんですね。駿々堂が大体一手に引き受けて戯作本、それから『百千鳥』だとかいったものも出します。明治の17年ぐらいに宇田川<sup>うだがわい</sup>文海だとかがずっと戯作本を書いていきます。『巷説<sup>こうせつ</sup>二葉松』だとか『実録<sup>じしやく</sup>小芝居<sup>こしばい</sup>廻風』とか、そういうのを書きます。

明治18年に柳條亭華彦の『善悪草<sup>よしあしぐさは</sup>流行新形<sup>はやりの新がた</sup>』という戯作本、これが駿々堂が出した最後なんです。このころになると、駿々堂も東京から明治18年ごろの圓朝だとか伯円だとかの版權を無断で勝手にとってくるんですね。戯作本から速記本へという切りかえをやり始めるわけですね。

だから、最初に速記者は、速記本を書く、つくることは自分たちの速記の普及のためにやり始めるんですね。そらもう、圓朝であろうと何であろうと、本の序文を見れば、私たちの速記というものを普及させたいという旨がずっと書かれてあるから、そここのところわかるわけです。恐らくは、最初に速記本の読者になったのは、戯作本を読んでいた読者層ではなかったかなと思います。そこから、「ふだんしゃべっている言葉でそのまま書いてるやないか。これはおもしろい」というふうなことで一気にワーズと普及をしていきます。

圓朝<sup>えんちょう</sup>なんかはどうも不愉快やったようですね。「何遍も何遍も俺の本出してんのに、一体どこの出版社が何冊出してるかさっぱりわからん」と。今なら著作権とかで、「ちょっと持ってこい。印税で生活してみたい」と言うところですが、一切そんなもんありませんでしたからね。それなら自分で出そうかなと、そんな気にもなる。圓朝の言行録なんかを読んでいると、どうもそんなところもあつたようでございますが、その当時は今と違ってせちがらくないんですね。本になったというだけで講談師や落語家にとっては名誉なことだったんです。

何で圓朝であり講談であるのか。落語なんてほんのちょびつとしか速記になってないんです。落語は1

冊の読み物の量として全く足らんです。だから、大阪でも人情噺ばなしをやっている翁家おきなやさん馬、本名桂庄治郎という人の話が中心なんですね。だから、落語とは言いながらも大方は人情噺です。落語そのものがネタの速記本なんてほとんど出てません。それはボリュームの問題です。出るとしたら、全集みたいな形でネタが5つ6つ中に入って1冊で綴じられているという、そんな程度でございます。主なる落語なんていうたって、ネタ数にしたら200。それが10ずつ入ってたって、20冊でしいます。そういう意味においては、落語というのは読み物としての速記本には不向きであったわけですね。しかし、これが幸いしたなと思うんです。何かというたら、やっぱり落語はおもしろいから実地に見に行かなあかんあと。

ところが、講談は講談師が自分の首を絞めたところがあるんですね。何やいうたら、毎日講釈場へ行かんでも、この1冊借りたら済むんです。「ああ、『水戸黄門』てこんな話やな。あの講談師がやってるのはこれやな」ということになって、講釈場へ通わなくなりました。これが講談の衰退していった一つの理由ではないかなと思います。

また、速記本が講談のやり方というのをある種変えたんですね。それまでは本を見て読んでおりました。「見ておったんではあかんあ。演技的要素も加えんとあかん」と。これで私なんぞは苦勞するんですね、覚えなあかんから（笑）。もう、年とったら覚えなあかんのが苦勞でございます。苦痛でございますね。そやから、こうして読んでいる間はいいですよ。でも、目の持っていく方だとか、そんなものが全部死んでしまいますからね。

落語だってそうだったんですね。前に見台けんたい置いてたんですけれども、だんだん演技的要素を入れなきゃならない。だから、先に落語は演技的要素のほうへ行きました。講談のほうはまだ読んで、「こらいかなあ」というふうなところから本を離すようになったけれども、時既に遅ときしてございますね。私なんて、トキのようなものでございます。非常に希少価値だけでもってるようなものです（笑）。

そういう意味において講談というのは、一遍見聞きしたものは知識として入りますから、知的興味でお客さんを引きつけるは、もう限界というのか、速記本で事足りたわけですね。ですから、急速に衰えていきます。

その後、浪花節という音楽的要素の入った、講談と同じストーリーのものが出てきますから、そういった意味においては浪曲にもやられるということになってきて、だんだん衰退して、今何とか持ちこたえているというところがございます。

田鎖たくさ式は、一生懸命こういう『新式速記術』（示す）とか、そういうふうなものを出しておりました。そういったところから田鎖式というのが主流になりました。でも、実は初期の時代を調べてみると、田鎖式だけかというのと、どうもそうではなくて、別の手があるんですね。「速記」ではなくて、「速成筆記」という形で、後で見てくださいとわかりますが、同じような記号なんです。これは平林静順せいじゆんという人が恐らく自分で工夫をしたものであろうかと思えます。よく似てることは似てるんですけれどもね。そやから、最初の速記の記号というのを見ていると、堺さかいというのをこう書くんやとか、浜とかタイとか、こういうふうなものが、明治19年ですけれども、出されております。「大阪府平民平林静順」、大阪府いうけど、堺の人間とちゃうかなと勝手に思ったりもしますけどね。

もう一つ手が違うなと思うのは、田鎖式の若林珮蔵かんぞうだとか、そういった者の書きようと違うなというのをもう1冊だけ私は見つけました。『新潟奇聞娘演説』という題の本で、名古屋のほうの講談師というのか落語家というのか、狂訓亭ためなが為永栄二という人の「演説」。これは為永栄二の二代目か三代目のペンネ

ームを引き継いだ人だと思えますけれども、「藤井源太郎筆記」となっているんですね。速記でもなければ速成なんかでもなくて、筆記となっているんですが、これを見ると、かぎ括弧だとか、そんなものはないんですね。二重丸だとか段落とか、そんなものもありません。

「誰じゃ 私でございます <sup>ひょうとく</sup>表徳か上がれ 相変わらず御酒でございますか」とか、そういうふうなことが書かれてあるんですけれども、田鎖式から始まった圓朝だとか伯円だとか、そういったものとは全く表現法が違うんですね。藤井源太郎という人が恐らく独自につくっていったんだろうなということが推察できます。

このころは、田鎖式に触発されて、「よし、俺も独自につくってみよう」とか、そんなんが恐らくたくさんあったんだろうなと思います。その辺の歴史はよくわからないんですけれども、恐らく、そういう機運というのかな、そういうのが全体的にでき上がりつつあって、その中で田鎖式が一番優秀であって、そこからの派生で今も残っているのではないかなと思うわけです。

じゃあ、言文一致だとか、そういうものっていつごろから始まったんだ。圓朝の速記本が二葉亭四迷だとかいろんな者に影響を与えたことは確かなんですけれども、それだけかということになりますと、言文一致なんてのははるか室町時代からあって、狂言の台本なんかを見ると、その時代のせりふ、その時代の地の文です。だから、あれも言文一致と言え言文一致ではあるんですね。

過渡期に、やっぱり今までの戯作のつくり方ではあかんのとちやうかというふうな動きが出るんですね。地の文ばかりだらだら並べていたんではいかんなど。これは『<sup>みおつくし</sup>濤標』というものなんですけれども（示す）、「東風軒半馬述 香夢亭主人編」ということで、「述」だからしゃべるとるんですね。これはいつかというと明治 16 年。だから、圓朝よりも前です。でも、中を見ると、かぎ括弧でせりふの部分は入れたりしてるんですね。

ですから、言文一致ということに関しては、何となく速記が出る前ぐらいから、新しい小説のありようみたいなものは、西洋から英語なりの文学が入ってきたときに、「違うぞ。ちょっと考えてみなあかん。文語体ばかりでずらずら並べていくもんと違うんちゃうか」と。そういうふうなことをかぎ括弧で、「そういう貴様は勘三殿」「うまくいったのう」とか、こういうことが書いてあるんですね。これが明治 16 年です。

そやから、せりふと地の文という形、人の言葉——せりふというよりしゃべり言葉というものが入ってくるのは、何も圓朝だとか速記だとか、そういうふうなものではなくて、その前あたりからどうもそういう雰囲気はあっただろうなと。たまたま 1 冊見つけたんですけれども、恐らく丹念に当たっていくと、例えばお芝居の台本みたいなものを市販したりしていたら、恐らくはそういうふうな口語文が随分と入ってくる、せりふが入ってくるというふうな形のものであっただろうなと思うわけですね。現実に明治 16 年のこれなんか見ると、ああそうかいなと思うわけです。

ですから、速記というのはそれをば加速させた一番いいツールだったと思うんですけれども、その前にやっぱり何か、「戯作よりもなあ。何とかしたいなあ」というふうな動きは恐らくあっただろうと思います。

後で関山さんがお話しになるでしょうけれども、伊東橋塘（伊東専三）の『<sup>きょうとう</sup>暁天星五郎』、これは文語体でございますけれども、これを講談にしているんです。これをもとにして、大阪の神田伯龍口演、丸山平次郎速記という形で作っているんですね。ですから、丸山平次郎あたりがこんなんをもとにして、ありとあらゆるものをネタとしてあさっていたことは間違いのない事実でございます。

とにかく、ネタ切れになってくると、『春色梅曆』だとか、それから十返舎一九のいろんな作品とか、何でもかんでも講談風に仕立て上げていってます。そもそも、明治の40年ぐらいの速記本になると、「ああ、これでネタが尽きてきているんだな」と。次の創作の段階に行くちょっとしたプロセスのときに、恐らく講釈師の名義借りだろうと思うんですが、有名な戯作本をもとに速記者が書いていると、そういう段階に入るかと思います。

一つはマンネリ化していったこと、それから、速記者が忙しくなってくるんですね。地方議会もひっくるめて、議会という議会に速記者が全部駆り出されていきますから、速記というものがその段階で十二分に行き届いた、もう俺たちの宣伝は十二分に行き届いた、帝国議会だけではなくて地方の議会も雇ってくれるようになったと思った瞬間、まあ芸能から手を引こうかと。そういう時期と玉田玉秀齋や山田酔神とか、そういった形のもののがちょうど一致をしてくるわけですね。ですから、ネタが行き詰まる、速記者は速記者で忙しくなってくる、そういった必然の中から次の「書き講談」という創作物が生まれてきたんじゃないかなと私は思っております。

田鎖綱紀というのはおもしろい人で、何も速記ばかりやないんですね。これは英語の翻訳本ですけども（示す）、英語というのはこんな構造をしてるんだとか、そういうふうな本を出してるんです。『ブラウン氏英文典直譯 全』、英語の文法はこのようになっているとか、前置詞はこうなんだとか、そういう本を出しているんです。平林静順ひらばやしせいじゆんもそうですけれども、源綱紀が物すごい文化人であったことは間違いないわけですね。

それと、『日本速記事始』だとか、そういったものは余り信用なされないように。岩波から出ておりますけれども、調べたらみんな『日本速記五十年史』だとか、戦前のをそのまま丸写ししているだけでございました。詳しくは私の本を見ればわかるんでございますが（笑）、冊数も間違ってるし、もうむちゃくちゃでございました。そういったものがまことしやかに出回っておりますけれども、ちゃんとした冊数は1,700何ぼということですので、そういったこともしっかりとご記憶くださればと、こう思っております。

時間がやってまいりました。取りとめのない話ばかりでございましたけれども、べっぴんの関山真理子さんがはるかに歯切れのいいものを聞かしてくるだろうと思います（笑）。どうもありがとうございました。（拍手）

~~~~~

村上 浪六 むらかみ・なみろく（1865年12月18日（慶応元年11月1日） - 1944年（昭和19年）12月1日）日本の小説家。

山県 大武（やまがた だいに、1725年 - 1767年9月14日（享保10年 - 明和4年8月22日））は、江戸時代中期の儒学者、思想家。

野沢氏の出自。名は昌貞。字は子恒。通称を軍事のち大武と称した。医号は柳莊、洞齋。

源綱紀 みなもと・こうき 田鎖綱紀が一時名乗った姓

○司会（小原勉） 南陵先生、ご講演と速記本の解説、ありがとうございました。

○司会（小原 勉）　続きますして、明治大学の関山真理子先生から「速記本の出現前後」というテーマで、ご報告をお願いします。

報告に先立ち、関山先生の略歴等をご紹介します。先生は現在、明治大学の行政研究所で講師をお務めです。ご経歴は、成城大学修士課程、2008年成城大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程後期の単位を取得し、満期で終えられております。研究テーマは、開化期文学の研究を主として、『伊東橋塘の講談落語本』、『臼井六郎復讐譚について』などの論文があります。

速記本が出現する前後に活躍した伊東橋塘は、新聞記者、戯作者として活躍しながら、「^{はなしつかうしやくし}落語家講釈子の^{てうちんもち}提灯持」と自称するなど、芸能の世界と近い人物でした。この人物を中心に、圓朝の速記本が刊行される前後の新聞・出版界、戯作界がどのような状況であったのかということをご紹介します。と思います。

先生、よろしくをお願いします。

~~~~~